

浄

monthly
JŌDO

土

4

April 2006



法然上人鑽仰会

2006

Kajitani Yoshika

梶谷佳加

比叡山の麓の小さな工房で、
その土地の土を丹念に練って、
陶人形を作っている一人の女性がいます。
郷土人形のような、
土の香りのするその人形たちから、
たくさんのぬくもりが伝わってきます。
誰もがみんな持っていた童心。
誰もがみんな大事にしたい童心。
そして誰もがみんな持ち続けたい童心。
そんな私たちの心に、
人形たちが呼びかけてくれています。

1970 奈良県生まれ

1988 京都芸術短期大学造形芸術学科陶芸コース入学

1989～入選歴

中日国際ビエンナーレ、京展、関西展

奈良展、天展、美濃国際陶磁展、長三賞展

1992 京都芸術短期大学陶芸コース専攻科修了

1997 滋賀県大津市山中町に独立

<http://www.eonet.ne.jp/~kajitani/>

4月号は 西遊記

16世紀の中国、明代に大成した伝奇長編小説。実在の高僧、三蔵法師玄奘が、白馬・玉龍に打ち跨り、三神仙(神通力を持った仙人)、孫悟空、沙悟浄、猪八戒を共に従えて、さまざまな冒険をしながら天竺へ経を取りに行く物語である。

著者は呉承恩と言われているが、複数の作家が種々に細部を加えていったのではないかという説等、異説あり。

(編集部)

表

紙

の

言

葉

浄土

2006/4月号 目次

カラーグラビア寺院紀行 東京千石 一行院.....	写真=タカオカ邦彦	1
特集吞龍上人		
子育て吞龍さま	一龍斎貞花	6
吞龍信仰と吞龍講	川添 崇	14
子育て吞龍上人絵伝		20
寺院紀行 東京千石 一行院	真山 剛	22
会いたい人 黒鉄ヒロシさん①	関 容子	30
響流十方	袖山榮輝	38
珈琲のことば珈琲のじかん	藤原理加	42
シネマ随想	袖山榮眞	44
Jフォーラム		47
浄土誌上句会	選者=増田河郎子	48
マンガ さっちゃんはねっ	かまちよしろう	51
編集後記		52



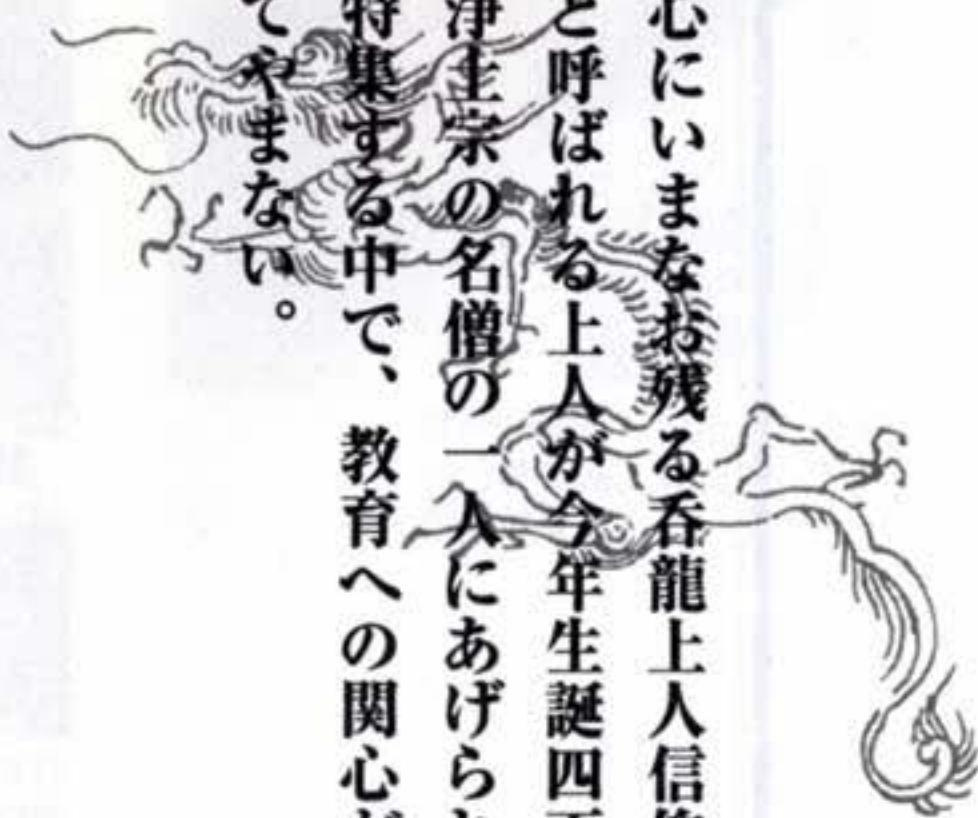
表紙題字=浄土門主 中村康隆猓下
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎

子育て

吞龍
さま

一龍齋貞花

北関東を中心にいまなお残る吞龍上人信仰。子育て吞龍さまと呼ばれる上人が今年生誕四百五十年を迎える。浄土宗の名僧の一人にあげられるこの吞龍上人を特集する中で、教育への関心が深まることを願ってやまない。



太田の大光院といっても、ぴんとこない人も、子育て呑龍^{どんりやう}さまといえはわかる人が多い。浄土宗関東十八檀林の名刹大光院の開山が呑龍上人です。

武州岩槻城主太田資正の家来で、新方領^{にいがた}一の割（春日部市）に屋敷を構える文武両道に優れた井上将監信貞、夫婦至って仲睦まじいものの子宝に恵まれず、信心深い妻の真弓は、近くの圓福寺の龍神様に朝な夕な、

「何卒、丈夫な子をお授け下さい」

と祈願、三七、二十一日の満願の夜、真弓は龍が飛んで来て屋敷の中に入る夢を見て懐妊、弘治二年（一五五六）四月二十五日、男子出生、龍神様から授かったによって龍寿丸と命名。生れて間もない口も十分に利けない頃から、南無阿弥陀仏の名号を聞くとニコニコ笑いい、「ナムアミダブチュ」と称える。物心つくや泥遊びをしているかと思うと土で仏様をつくり手を合せ名号を称えます。

やがて圓福寺へ手習いに、更に光明寺の寺子屋へ通い、一を聞いて十を知るというたところの通り師匠も驚くほどの上達ぶり。

十三歳の春のこと、紫の衣をまとった気高い僧が夢枕に現れ、
「汝少年といえど求道の心賞すべし、出家の道は念仏の一門こそ幸いなり、浄土の門に入

るがよからうぞ」

このこと両親へ、両親も龍寿丸の決心を認め、翌^{あぐ}る十四歳になった龍寿丸は、岩槻の白龍山林西寺の炭弁和尚^{きやうべん}にお弟子入り、緑の黒髪をそりこぼしました時には有難さに涙こぼれたのでございます。吞龍という法名を頂き一心に修行。吞龍の利発さに炭弁和尚は一年後、最高学府である三縁山増上寺住職観智国師の元に弟子入りさせました。

増上寺の学寮には全国から優等生ばかり集っておりますが、たちまち頭角を現し十八歳にして上人と呼ばれるほどになりましたのでお許し頂いて諸国行脚の旅に。

羽生田村まで参りますと、この村に悪い病がはやり、死ぬ子供が多い、そこで手当の仕方や、食べ物などを教え、そして病氣平癒の祈願をこめると病が治る、「有難いお坊様じゃ」と多くの人が上人を慕って参りますので、一体のお地藏様を刻みお堂を建てて安置し七日の間お経を唱え、

「此の地藏には、わしの一心がこもっている、子供が病にかかったら願いなされ」
「有難いお地藏様だ、ご利益がある」

と方々から子供を連れてお参りにくるようになりました。これが吞龍上人が残したと伝えられる羽生田の子育て地藏でございます。

八年の修行を終えて林西寺へ帰りますと、炭弁和尚喜んで、

「わしは隠居するから後を頼むぞ」

かくして林西寺住職に就任。その後武州の長福寺、佐野の宝龍寺など次々と開山、開基となりました。このことは呑龍上人一代記和讃の中に記されています。

慶長十六年徳川家康公は、ご先祖新田義重公が上州世良田から出ましたところから先祖供養の寺院建立を思いたたれ、観智国師に相談されますと、

「弟子の呑龍ならば必ず立派に建立し法灯を守ります」

という推薦により呑龍上人見事に建立、これが太田の義重山^{ぎじゅう}大光院新田寺です。呑龍上人が開山となり住職に就任。観智国師は、天正十八年八月一日の徳川家康公江戸入りの際、増上寺門前で家康公を待ち受け案内した存応上人です。これが縁となり以後家康公は存応上人の教えを受けています。

呑龍上人の教えを受けたいと千人からの修行僧が集って参りますから有力な檀林として大いに栄えるようになっていきました。

この当時は、豊臣から徳川へ移り行く時代でまだまだ世の中が納まらず野武士が徒党を組んで押し入り、金や米を奪い一寸手向えば斬り殺すという有様で百姓、町人の難儀は一通りではありません。

「気の毒なことだ、助けられるだけの人は助けてやろう。この大光院は三百石のご朱印を

頂いている。三百石残らず施しなされ」

しかしそれでも足りない、そこでお粥にしてこれを多くの人に施したのが始まりで、太田の吞龍さまで正月の八日と十二月八日の年二回、お粥を炊いて参詣の人々に振舞うようになったのでございます。

当時貧しい家では間引きが盛んに行なわれていましたが、非常に悲しみ説得し、貧しい家の子供を引取って、上人はじめ一山の僧侶は質素節約をして多くの子供を養育しましたところから、子育て吞龍さまと呼ばれるようになったのでございます。

或る晩のこと上人が寝ておりますと、青い直垂ひたたれを着た若者が、

「私は龍宮より参った使者でございます。上人様の有難い説法をお聴きしたいと龍神様乙姫様をはじめ龍宮一同の望み、何卒お越し下さいませ」

男が天に向って手招きするや、黒雲が舞い降り、上人それに打乗り風の間に間に参ります内いつか龍宮城へ、龍神はじめ乙姫、その他女官、武官綺羅星の如く居並ぶ中、上人おごそかに説法、一同襟を正して拝聴し感激の涙を流す者もございます。ところが一匹の悪い龍が邪念を起しお帰りになる上人に危害を加えんとした。上人早くもこれを見破り神通力をもって翼は金色にして口から火を吐き好んで龍を食べるといふ金嘴鳥に変

身し、たちまち悪龍を一口に飲み込んでしまいました。夢から覚めた上人は、以後龍を呑んだので曇龍から吞龍と文字を替えることになったという伝説がございます。

父親の病を治そうとご禁制の鶴を殺してその血を飲ませようとしたことが露見し、役人に追われた若者が寺へ逃げこむや、人を助けるのが出家と、この孝子をかくまったもののかくまいきれずこの若者を連れて大光院を出て五年間の苦勞。ここのお話は紙面の都合で割愛、何卒口演お聴き下され。

「吞龍の罪お許し下され」という観智国師のご遺言によって、二代將軍秀忠公の命で罪人を連れて逃げた罪も許され、大光院へお戻りになるや、再び参詣の人で雑踏する有様、お弟子たちも戻ってきて千人を越す学徒で以前に勝る繁榮となりました。

吞龍上人は、六十八歳とられますやお身体優れず、そこで自分の像を残そうと彫刻師に刻ませましたが、一心に念仏を称えるも上人の心入らず、「これは死物、残しておいても役に立たぬ」とご自分の木像を真つ二つ、ご自身でのみを持って刻まれました木像こそ、大光院の本堂に安置されている自刻のお木像です。

「わしはもうじきこの世を去る、来る九日の正午こそ大往生の時と覚えたり、我が亡骸を

茶毘に附すことなく本堂の西に靈廟を建てそのかたわらに葬れ、我末長く寺門を守護し学徒を保護し、我が塔前に祈念する者には必ず心願成就すべし」とご遺言。仏前に向い自ら金盤を打鳴らし静かにお念仏、更に七日間別時念仏をお勤めになられ、元和九年（二六二三）八月九日、「南無阿弥陀仏」と十念を称え終るや眠るが如く大往生をされました。

今も参詣人の絶え間ない、子育て吞龍上人抜き読みの一席でございます。

吞龍上人の一席をとのご依頼により書かせて頂きましたが、「法然上人ご一代記」（CD化）「選擇本願念仏集・法然上人と九條兼実公」「熊谷蓮生房」（CD化）「浄土宗二十五霊場物語」、その他「お釈迦様物語」はじめ多くの仏教講談を口演させて頂いています。手を合せることの大切さ、非行を防ぎ親孝行につながるという講演もいつも致しております。

浄土宗の檀家として、ゆかりの講演を口演させて頂けますこと有難い次第です。合掌。

吞龍と信仰

川添 崇





6～7歳の頃、郷里の高知にて

ら始まって、二軒目、三軒目、四軒目が紀尾井町のお宅でした。とにかく日本舞踊の名流、藤間流お家元の家ですからね、門構えの立派さ、玄関の三和土^{たたき}の広さ、廊下の幅も並外れてて、かつての名横綱柏戸さんが酔って連れてこられて料亭と間違えた、というくらいですからね。で、座敷に通されたら、そこに松緑さんがおられて、や、と片手を挙げると、

「おれは、

この世に

人知れず、

のちのち、

の中、

昔、

物、

ア、

ア、

「おれは、

ア、

おれは、

ア、

おれは、

ア、

おれは、

ア、

おれは、

ア、

おれは、

ア、

おれは、

ア、

おれは、

ア、

おれは、

ア、

おれは、

ア、

おれは、

ア、

おれは、

ア、

おれは、

ア、

おれは、

ア、

おれは、

ア、



高校生の頃。学校は地元の土佐高校だった

戒をたもたせ候をやぶり候わんずればとて、たもつとも申し候わぬは、いかが候べき。…一時もたもつと申し候が、めでたき事と申し候は、まことにて候か。答う。…たといのちにやぶれ候とも、その時たもたんとおもう心にて、たもつと申すはよき事にて候。

法然上人「百四十五箇條問答」

「戒律を守ると誓いますか」と尋ねられ、守り通せると思えなかったので「誓います」とは答えなかったというのは、いかがなものでしょうか。…その時だけでも「守ると誓います」と答えるのが尊いといわれているのは、本当でしょうか。お答えします。…たとえば、後に戒律を守れないことがあると、その時、戒律を守ろうと心に誓って「守ります」と答えるのはよいことなのです。

雪降る夜に

一昨年の夏のこと。暑さのせいかな寝不足のせいかな、頭がふらついた。

近所の病院に駆け込むと、代替わりしていた若先生が診てくれた。案の定、血圧が高かった。案の定というのは、もともと二十歳を過ぎた頃から高血圧症と診断されていたからだ。

ただし病院へ行くのは風邪や腹痛の時だけ。血圧の方は「若いんだから、薬は飲まずに様子を見ましょう」という大先生の言葉に甘えて、二十年近く放っておいた。しかし年々体重は増えていく。「体重のコントロール」という大先生の指示が守れないまま、気がつけば四十歳を越えていた。

「どうですか、節制できますか」

血圧を測り終えたあと、若先生はそう尋ねた。

もちろん節制・減量が必要なことは重々承知している。だが、現実はなかなかままならない。「若いんだから」の有効期間も、もう切れつつある。

「できません……」。もはや私に体裁を取り繕う余裕はなかった。それからというものの、毎朝薬を飲み、毎月一回の通院が始まった。

ところで若先生と私とは同い年。患者と主治医の付き合いではあるものの、男同士、それだけでは何となく物足りないものを感じていた。

そんなある日、二人は偶然、酒を飲み交わすことになった。

それは昨年のお誕生日のこと。朝から一日中、雪が降っていた。その晩、ある檀家の祥月毎日のお参りに行き、一献振る舞われて寺に戻った後、酔った勢いのまま、その日三度目の雪かきを始めた。

ベンチ・コートに身を包み、フードを深々とかぶって、玄関前から本堂前、道から山門を出て市道の歩道部分に取りかかった。その時のことである。向こうから、やはりコートのフードを深くかぶった大男が歩いてきた。

「こんばんわ、こんな時間に雪かきですか。あ、やっぱり若住職だ。奇遇ですね。ねえ、飲みに行きましようよ」

少々酔っていたその大男、見覚えがあると思ったら、わが主治医だった。それにしても、一緒に飲もうとは驚いた。だって彼は私に「節制できますか」と聞いた当の本人である。私の血圧も肝臓の数値もコレステロールの量も、すべて承知のはず。しかも酔ったまま雪かきをしている高血圧患者と飲み交わそうというのだ。

いったんは断った。だが、「こんな偶然滅多にないですよ」との一言に押し切られ、歩道に雪かきをおいたまま祝日営業の居酒屋を探し回り、私は長靴に

ジャージ姿のまま、結局、二人はラストオーダーまで酌み交わした。

楽しくも、何とも不思議な晩だった。

年明け、例のごとく若先生に診てもらった。「新年会やらなんやら、また体重増えちゃったんだよね」と愚痴をこぼすと若先生、「雪かきだけじゃダメですよ。やっぱ、運動しましょ」と釘を刺してきた。

そうきたか。薬はすでに飲んでいる。あとはもう運動して減量するしかない。そう、私にとって節制減量は、もはや「できる、できない」の問題ではなく「する、しない」の問題になっていた。

戒律は浄土往生の絶対条件ではない。しかし戒律は仏教徒としてよりよく生きていく指針のはず。守り通せるものではないだろうけれども、「守れないから守らない」と開き直っては、やがて仏道を踏み外してしまおう。守ろうという意志が大切なのである。

「できない」と「しない」は大違い。

と言いつつ今、反省しきりに腹筋腕立てしてみるのである…。

珈琲のことば

の珈琲

じかん

その四

『アジアの洗練・中国の豆』

中国といえばとにかくお茶が有名ですが、最近、中国珈琲というのもちらほら見かけるようになりました。いつもお世話になっているこだわりカフェ「D」のメニューにもちょうど、中国・雲南省産の「思茅（しもん）」という豆が。そこで今回は、興味津々、その「思茅」をいただいてみることにしました。

それにしても、中国の珈琲豆とはいったいどんな味がするのでしょうか。珈琲を待つ間、世界地図を見ながらいろいろな想像を巡らせるのも、ここ最近の楽しみです。地図を見ると、雲南省は中国の南奥。ベトナムやラオスやミャンマー、タイにも隣接しています。緑濃い深

山幽谷の地。白い霧が立ち込めるお茶畑。いつかテレビで観た雲南の映像がふっと頭に浮かびます。さらには、かなり古過ぎますが、かの『三国志』的一幕、諸葛孔明の南方遠征の際のシーンなども……。

そして、初体験の「思茅」はといえ、いい意味で事前のイメージ（野性味溢れる土っぽい味わい）とはまったく違う、高貴といってもよいほど上品で洗練された香りと味わいを持っていたのでした。驚き顔の私に、マスターがこう教えてくれました。

「僕も『思茅』を初めて飲んだときは、中国ってやっぱり広い、奥が深いなあと感心したんですよ。そして、この豆の畑



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。

どしどし編集部にお寄せ下さい。

